
空飛ぶ大陸での隠遁生活

椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空飛ぶ大陸での隠遁生活

【Nコード】

N5378T

【作者名】

椿

【あらすじ】

男には夢もなくやりたいこともなかった。

ただ日々の生活を惰性で続けることを愛していた。

自分に不相応な望みを抱くことなく他人に望むこともなく負の感情があっても飲み込んで生きてきた。

その生き方は男にとっては自然だったが、周りから見れば人形のようなだった。そんな男が望まぬ力を得た話。

16巻までの知識ですので話が進むにつれ、

独自解釈が入る可能性が高くなります。
ご了承ください。

第1話 プロローグ（前書き）

多分主人公の考えはあまり一般的ではないと思います。

第1話 プロローグ

ここはいつたいどこだろう・・・。

男が目を覚ますと真っ白な天井が見えた。

「確か俺は次の講義の課題を終わらせて布団にダイブした筈・・・。
成る程、夢か！・・・解決したところで寝よう。」

そうつぶやくとそのまま目を閉じてしまう。

男にとって夢とは娯楽であり、みたくなるときはどう終わらせれば
いいか

感覚的にわかっていた。

〈待て、これは夢ではない。目を開いて話を聞け。〉

突然空間に音が響く。男はその音に反応せず未だに目をつむり続けている。

〈剛胆な男め、さっさと目を覚まさんか！〉

先ほどよりも勢いを増し、空気の振動すら感じられるほどの大声が響いた。

さすがにうるさかったのか、体を起こした男はいかにも寝起きだという不機嫌な様子で

目の前の空間をにらみつける。

「ようやく起きたか。」

「うるさい。・・・俺の夢のくせに俺の睡眠を邪魔するな。」

「ここは貴様の夢ではない。そも、貴様は現在夢を見られるような立場ではない。」

「・・・？なにをいつている。現実こんな空間はないだろう。」

男が言うとおり、そこはどこまでも境界線が見えないただただ白い世界だった。

終わりもなく、自分がたっている場所すら見えない。まさに夢で見るような不安定な場所である。

「ここは貴様達の世界ではない。貴様らの言葉で言うところの死後の世界だ。」

「死後の世界だと・・・ならば俺は死んだのか？だとすればあなたはいつたい何者だ。」

「私は管理者。わかりやすく言えば神か？」

「神ね・・・まさかあえる存在だとは思わなかった。俺はずいぶんと恵まれているらしい。」

苦虫を噛み潰したように吐き捨てた男は改めて質問をぶつける。

「私の死因は何ですか？特に持病も有りませんし戸締まりも人並みにしていたはずです。」

突然死する理由が思いつかないのですが。」

へほう。頭の巡りは悪くないようだ。私の存在に対して一応敬うような姿勢を見せる。

その上自分が死んだことにも疑問を持たず受け入れ、状況を把握しようとする。

無作為に選んだがどうやらおもしろい者を選んだらしい。▽

「・・・お褒めにあずかり光栄です。」

へかっかっか。しかも自分の心が読まれていることを把握しているらしいな。

あえてへりくだることで自身を保とうとするか。よい、好感が持てる。▽

「・・・死因の方を教えてくださいいただけますか？」

へおお、そうだったな。死因は心臓麻痺だ。理由は私の行いに関係する。

つまり、貴様が死んだ原因は私にあると言うことだな。▽

「・・・なぜ私なのか聞かせていただけますか。」

へほう、内心では私に対する憎しみで一杯なのにまだそのような口がきけるのか。

貴様はずいぶんおかしい人間だな。貴様を選んだ理由は特にない。単なる偶然だ。望外の幸せだろう？神に選ばれたのだから。▽

今までの男の人生でここまで傲慢な言葉を聞いたことがあっただろうか？

勝手に人を殺し、その理由もただの偶然、自分ではなくともよい。

その上その死すら幸せであるといいのける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。ふざけるな。」

へくくく。ふざけてなどいない。く

「だろうな。神とはそうあるのだろうさ。俺たち人間に特別配慮があるとは思えない。

ちっ。もういい。はなしをつづける。」

へふむ？やけにあっさり引くな。先ほどの激情も今は形もない。貴様本当に人間なのか？く

「ただどうでもよくなったただけだ。神が人間の意見を聞くはずもないし、

どうあがいたところで俺は死んだんだろ？無駄なことは疲れるから嫌なだけだ。」

その言葉通り男から怒りや憎しみの気配は弱くなった。ただ嫌悪の表情のみが残った。

く
へやはり貴様はおもしろい。いっそ狂っていると評した方がいいな。

「俺への評価はいい。それで俺はこれからどうなるんだ？」

敬語もやめ、めんどくさそうに問いかける。

「貴様には別の世界に行ってもらおう。」

「別の世界？」

「へそだ。私が管理している世界の一つで貴様が生きていた地球とは別の星だ。」

「当然世界軸も違う。」

「世界軸？曖昧な理解でよければわかるが。」

「その理解でよからう。」

「つまりその世界の地球は貴様の世界の地球とは違うとわかっていればよい。」

「なぜそこに俺が行く必要がある？どんな世界なんだ？」

「最初の質問に答える気はない。」

「ただ貴様である必要はないということは先にも行ったとおりだ。その世界は、6000年ほどある種の特権階級によって支配されている。」

「地球で言うところの中世ヨーロッパが近いだろう文化レベルもそれに近い。違うのは人間だけでなく別の文化を持つ亜人がいる。この程度だろう。」

「なるほどな……。俺は起爆剤か。」

「話が早いな。変化がないのは緩やかな衰退に向かう。」

別に人間が残る必要はないのだがそれではいささかつまらんだよ。▽

「娯楽か。」

「へそうだ。安心しろ。その世界についてから干渉する気はない。思い通りというのも興ざめだ。▽」

「そうか。じゃ早くしろ。あんたと同じところにいたくない。」

吐き捨てるように言い放つ。言葉通りに1秒たりともいたくないといった感じだ。

「へずいぶんと嫌われたものだ。まあまあ。送る前に能力を授ける。▽」

「いらん。目立つ気はないからな。」

「へくくく。だが今のままではすぐに死ぬぞ。貴様が生きてきた世界とは危険のレベルが違うからな。▽」

「それでもかまわん。どうせ1度死んでいる。その理由が何であれ。」

「一分の迷いも見えない表情で言い切る。」

「へやはり狂っているな。普通の人間であれば意地汚く様々な能力を」

欲し、

中には不老不死さえ要求する者がいるのだから。▽

「別に否定する気はないがそいつらの方こそ俺にいわせれば狂っている。」

自分の身にあった力でなければいずれ破綻する。俺は自然のまま生きることを望む。

いつそのこと別の世界に行くのなら今の俺を消し去ったもらいたいくらいだ。」

へふん。それではつまらん。▽

「だろうな。かなえてもらえとは思っていない。能力とやらも勝手に決める。」

へそうか、では貴様が一番気に入っている体と技をくれてやる。しかも複数な。▽

いかにも名案を思いついた、という口調で笑みを浮かべる。

その顔は男にとって神ではなく悪魔に見えた。

「・・・っ！まで、それは！」

へ拒絶はさせん。ククク、クアーカツカツカツ。自然のまま生きることを望む男が

これほどの能力を持つ男達に惹かれているとはな。実に不自然だ。いやある意味今まで一番人間らしい。自分には届かない者に憧れるのは当然だからな。

この力であれば否応なく世界に影響を与えるだろうしなあ。今か

ら楽しみだ。▽

「きさまぁー!!」

男の罵倒をBGMにして神は続ける。

へ改めて貴様に説明する必要はないが一応様式美なのでな。

与える体は戦女神のセリカ・シルフィル。人の魂では維持できないだろうから

貴様の魂は幾分か高位の存在に近づけてやる。記憶の薄れは心配しなくてよい。

次に能力だな。セリカ・シルフィルの魔術と剣技、

幻燐の姫將軍のリウイ・マーシルンがもつ王としての資質、

姫狩りダンジョンマイスターの魔王が持つ魔力と知識

神採りアルケミーマイスターのウィルフレド・ディオンの工匠としての能力だ。

どうだ、嬉しいだろう。▽

そう言い切った顔は誰もが見られるであろう美しい笑顔だった。

「貴様はやはり神だ。これ以上ないくらい人間を馬鹿にしているな。」

へそうだとも、私は貴様らとは存在している位階が違う。

貴様らの思いなど考えるに値しない。貴様は実に嫌がらせのしがいがある。

貴様の憧れなど私には関係ない。憧れを汚された気分はどうだ?▽

「もういい。貴様とは二度と会いたくない。さっさと消えろ。」

へそうだな。まだまだいじり足りないが貴様の悪意をこれ以上受けるのも不快だ。

後は好き勝手に生きるといい。▽

その顔に未だ人を小馬鹿にする表情を浮かべたまま
神は円を描くように手をかざした。

へ最後に名付けてやろう。貴様は彼の英雄達が活躍する大陸の名をとってラウルと名乗れ。▽

「・・・断ったところで無駄なのだろう。」

へさすがに物わかりがいいな。▽

円を描ききるとそこは黒に染まりラウルを飲み込んでいく。

へではな。精々楽しませてくれよ?▽

「・・・いつか殺す。」

へク、おもしろい。貴様には神殺しなぞ無理だ。いくらその体を持つとうがな。▽

「××××××××。」

ラウルの最後の言葉は体とともに黒い円に飲み込まれた。

第1話 プロローグ（後書き）

次回からはあんまりシリアスじゃないと思います。
今回がシリアスなのはわかりませんが。

第2話 墜ちてきた男（前書き）

しばらくは原作に入らないです。多分。

第2話 墜ちてきた男

ラウルが目を覚ますとそこは草原だった。

「ちっ。あのやろう。・・・とりあえず現状の把握とこの世界のことを調べないとな。」

常識では考えられない事が起きたのにずいぶんと冷静なラウルだった。

さすがに神が狂っていると表しただけのことはあるのだろう。

とんでもない適応能力である。

「まずは自分の体だな。セリカの体か・・・。確かに奴のいうとおり懂れてはいたが、

自分がそうなるとは思いたくなかった。アストライアも望まないだろう。

・・・侮辱だな。」

苦々しい顔で改めて憎しみを表現する。

ラウルはあらゆる創作物のキャラクターに敬愛の念を抱いていた。

信仰といってもいいかもしれない。登場する人たちはその世界で生きていくものとして

扱い、彼らの能力もそれを得るだけの背景がなければ得られないと

感じている。

降ってわいたような幸運（不運）だけで彼らの能力を得た自分は認めたくないのだ。

だがそれでも彼は

「得たものは仕方ない。あきらめよう。幸い奴の説明が正しければここはラウルバーシュ大陸ではない。あそこは6000年も進歩しない世界とは違う。

まあ似ているような世界かもしれないがな。」

と全てあきらめたような顔で神への怒りを流す。

「セリカの体ということは魔力がなくなると女になるのか。気をつけよう。

・・・ん？まさか自分の意志でなれるのか？」

そうつぶやくと目を閉じ集中したラウル。

次の瞬間その体は丸みを帯び胸部と下腹部に違和感があった。

「つくづくだな。しかも動かすことに影響が出ない。はあ。」

その姿はサティア・セイルーンそのものであり声も幾分高くなっている。

道中ですれ違えば男でも女でも振り返る程目立つ美貌だ。

「町中ではこの方がいいかもな。こちらでも目立つがセリカよりは性別を間違われない分

不審ではないだろう。とりあえず戻るか。」

その言葉とともに男に戻ったラウルは疲労を隠そうとしない。

「この分だと他の能力も俺が思っている以上か？

一番の疑問はまおーさまだな。彼の魔力はもしかして全盛期ではなく

エステルED後のか？性格にまで影響はないようだな。

今はまだ・・・なのかもしれないが。」

手を開閉し体の調子を確かめながらなおもラウルの独白は続く。

「リウイとウィルの能力はとりあえずおいておこう。リウイに関していえば使う気もない。

戦争になど巻き込まれたくない。ウィルはこれから重宝するだろうな。

この4人の能力があれば殺されることはないだろうな。

それこそ国相手でも戦えるだろうが他人に影響を与えるのは極力避けたい。

ただでさえセリカの体なのに魔力もまおーさま。

アビルースみたいなストーカーは御免被る。

情報収集した後はどこぞの山か森で密やかに暮らそう。」

とても若者とは思えない決意をするとラウルは歩き出す。

「まずは村を探すか。多分言葉は通じるだろう。奴の目的がどうであれこの世界に

関わりを持たせたいことは確かだ。」

ラウルはどこまでも冷静に神の目的を推測しながら日が沈む方へ向かう。

その姿は彼の基となった男と似通っていた。

第2話 墜ちてきた男（後書き）

能力把握回。おおざっぱにですが。

基本1話の長さはこれぐらいです。

連続で投稿するときもあります。

大体の骨子はできていますが気分ですべて書いていますので、

話に統合がとれていないと感じたときは前の文を改訂することもあります。

更新は少なくとも1週間に2回はするつもりです。

日曜火曜の夜はおそらくしません。

第3話 彷徨い、出会う男（前書き）

基本直接書いてます。

第3話 彷徨い、出会う男

「さて、迷った。」

冒頭から情けないことををつぶやくラウル。

悲壮感は全く感じられないが言葉通り視界に映るのは緑萌ゆる草原ばかりである。

「かれこれ3日は歩いているが人っ子一人見えない。よほど田舎なのか？」

見知らぬ土地であればそういったこともあるだろう・・・といった感じで

現地の者が聞けば不快に思うことは間違いない事をつぶやく。

「それでもそろそろ変化があるだろう。一方向に進めばいずれ海に出る。」

この大陸がどのような形をしているか知らないが海がないことはないだろう。

・・・最初は月が二つあるから常識が通用しないかとも思ったが。

「

その言葉を肯定するように彼の上空には2つの月が輝いている。

「赤い月と青い月か。本当にラウルバーシュ大陸のようだな。

だが奴が嘘を言っていない限りここは別の星だ。

あの世界ではない。嬉しくもあり悲しくもありだな。」

「今日のところは休むか。魔力を火に変えて・・・よし。」

夜も更け歩みを止めると、適当な位置に火を焚きながら地面に腰を下ろす。

「最初は戸惑ったが魔力の操作にもだいぶ慣れたな。」

そういえばこの星には精霊とかいるのか？・・・おびき寄せてみるか。」

思いつきを深く考えることなく実行に移す。

とても神に対して慎重な態度をとった男とは思えない短慮な行動である。

目的地の見えない旅に彼も少し疲れていたのかもしれない。

「魔力の周囲にまき散らすイメージかつ威嚇しないように攻撃的な雰囲気を出さずに。」

すうー、はあっ。」

気合いを込めて体外に魔力を流す。

例えるならば煙のように彼の魔力は空気に混じっていく。

人間の視覚には感じるができないが周囲には紫を帯びた魔力の風が起こった。

「こんなものか。それほど強くはないから狂うこともないだろう。」

女神の魔力は強すぎれば生物を狂わせる。

普通の人間や獣には耐えられるものではない。

1流の魔術師であつたものでさえその力に抗うことはできなかった。

ラウルはそれを踏まえ慎重にごく微量の魔力を放出した。

「さて反応があればいいが……。うん？」

(どこ?) (ここ?) (あそこ?) (あそこ) (ここ)

ラウルの周りが不規則に明滅する。

(これ?) (これ) (このひと) (ほんとにひと?) (おいしい)

「これは……。精霊か? 本当にいるとは。」

(だれ?) (ひと?) (えるふ?) (おいしい) (なに?)

「私はラウル。そうだな。人でもエルフでもないな。君たちは精霊かい?」

(らうる?) (らうる) (おいしい) (せいれい?) (せいれい)

肯定か否定か言葉の上ではわからないがこちらのいつていることはわかるらしい。

そして一匹(?) あきらかにおかしい。

「どうやら道に迷ってしまったみたいだね。人が多いところを教え
てくれないかい?」

(まよう?) (おいしい) (ひととおい) (むこう?) (むこう)

精霊達(一部除く)が一方向に集まる。

「そうか、ありがとう。君たちは人とは仲がいいのかい?」

(おいし!) (ひと?) (なか?) (しゃべれない) (むし)

落ち込んだ雰囲気の流れる。どうやら人とは交流していないようだ。

「ふむ。(人前では気をつけるか)では私と友達になってくれるか
?」

(ともだち?) (ともだち!) (らうる) (ともだち) (ごちそう
さま)

「ああ、ともだちだ。・・・どうやら私の魔力はおいしいみたいだ
ね。

みんなも食べるといい。」

(これ?) (おいしい?) (おいしい) (もっと) (ありがと)

精霊達がラウルの周りに群がる。どうやらラウルの魔力は精霊には
ごちそうのようだ。

・・・一部は異常に興奮している。

「さて、（精霊のあり方はある程度想定内のような）そろそろ寝るか。おやすみ。」

（おやすみ）（らうる）（ねる）（おやすみ）（おいしい）

精霊達の言葉を子守歌にラウルは眠りにつく。

明日からはなかなか賑やかになりそうだ。

第3話 彷徨い、出会う男（後書き）

私の中で精霊はこんなイメージ。
発光体で大きさは子供の手のひらぐらい。

第4話 異文化に触れる男（前書き）

サブタイをく男で統一しようかな？
でも多分途中でなくなる。

第4話 異文化に触れる男

(らうる) (おきて?) (おきる) (あさ) (まんぷく)

「・・・ああ。朝か。おはようみんな。」

(おはよう) (らうる) (おきた?) (ありがと) (おきた)

ラウルは目を覚ますと起こしてくれた精霊達に挨拶する。

ラウルが魔力を放出しなくても食べられるらしい。

昨夜よりもはつきりと声が聞こえる。どうやら成長しているようだ。

「さて、それでは今日こそ人に会うか。この姿が目立つのは仕方ないが

せめて違和感のない格好であることを願おう。」

一縷の望みを抱き歩き出す。精霊達を先導にして。

「む。人の気配が強くなったな。どうやら昼までには着けるようだ。ようやくまともなものが食えるか。」

彷徨っている間ラウルは木の実や川の水しか口にしていなかった。

女神の体である以上食料は必要としないのだが元は人間、

やはり食の楽しみを味わいたいのだろう。

「・・・ああ。無理か。そういえばこの星で流通している通貨を持つていなかったな。」

その上私の常識は通用しないのだから前途多難だ。」

(じょうしき) (なにそれ) (ごはん) (つうか?) (ひときらい)

精霊達が騒ぎ立てる。言葉が通じる存在は貴重なのだろう。

ラウルの言葉にいちいち反応を見せる。

「常識とは皆に通じる決まり事のことだよ。例えば人には君たちが見えないだろう？」

でも私には見える。つまり私は常識外れということだ。

通貨とは何かをしてもらうために払うお礼のようなものだ。

少し違うがそう思っておけばいい。」

できるだけわかりやすいように精霊達に説明する。ラウルは子供好きであり

また同時に説明好きでもあった。

(ふーん) (ごはん) (らうるちがう?) (おれい) (はらう)

「大丈夫だよ。人とは違っていても君たちがいる。

それとご飯のお礼はいらないよ。ともだちだからね。」

精霊達の言葉は支離滅裂ではあったがラウルにはわかった。

精霊達には個という概念が薄い。故にラウルがいった常識から外れ

るということとは

恐ろしいことだ。それを心配したのだろう。

またお礼を払うということは自分の魔力に関してだろう。

明確な意志を伝えられるようになったことからわかるとおり

どうやら彼らにとって自分の魔力は成長を促すほど強力なのだ。

だがラウルにとってみれば普段出ている魔力は余剰分であり

ただ無作為に流すよりは彼らに吸収してもらうことの方が都合がいい。

いってみれば共生関係なのだ。

(ありがとう) (ありがとう) (らうるいいひと) (ともだち) (うれしい)

「ふふっ。私も君たちがいて楽しいから嬉しいよ。」

端から見れば独り言をつぶやく怪しい男だが

その顔には微笑を浮かべており男女問わず惚けてしまうような魅力があった。

「ようやくついたか。門はないようだな。都合がいいな。情報を集めるには女性体の方がいいか。」

町と呼べるほどの集落であったが門番はいなかった。

ラウルは無用の警戒をされないように女性になると

ファンタジー世界の情報収集の基本である酒場に向かった。

第4話 異文化に触れる男（後書き）

異文化とかいっときながら精霊としかふれあっていない。
こいつらでると会話が長くなる。

第5話 絡まれる女

ここでラウルの格好を説明しておこう。

体については省く。腰まである長い赤髪が特徴的である。（髪は切っていないらしい）

茶色の外套を羽織り、首元までしか露出していない。

外套を脱げば、緑色の全身を覆う剣士の服が現れる。

ただ胸がみてわかるほどあるので男と見間違ふことはないだろう。

剣を腰に下げその眼光から旅慣れた女剣士といった印象を持つ。

ただその美貌から間違いなく目立つであろう事は疑いの余地がない。

「ここが酒場か……。みんな静かにしてくれ。」

（わかた） （らうるおんな） （かわいい） （きれい） （おいしい）

精霊達に釘を刺しこの世界で初めて他人と接触する機会を得るため

ラウルは目立たぬよう静かに店へ入った。

入店したとたん舐めるような視線がラウルに絡みつく。

予想していたとおりの反応に呆れ半分安心半分といった思いを抱き

席を探す。

（さてと、ここからが肝心だ。できれば紳士的な奴がいればいいのだが・・・）

「その美人なねえちゃん。俺に酌してくんねえか。」

「おいおいやめとけ。腰に剣を下げてるじゃねえか。斬られちまうぞ。」

「剣を下げてるって事は平民だろ？ 貴族じゃねえならこわかねえ。」

男達が我先にとラウルに声をかける。内容は下品なものが多いが

笑いながらであるためどれも本気とは思えなかった。

（どうやらここにいる奴らは貴族ではないようだ。当然か。

そして剣を下けているから貴族ではないということは

貴族というのは力で支配していないのか？）

軽く笑みを浮かべながら男達の揶揄を流す。

（だが貴族に対して苦手、というより恐怖心はあるようだな。ならば別の力があると考えるのが自然か。）

そのままラウルは思考の海に入ってしまった。あくまで席を探しながら。

突然けたたましい音とともに店の扉が開かれた。

その音に店内は静まるがラウルは気づかずに未だ帰ってこない。

「さて、今日は気分がいい。店主よ、一番高い酒を持ってこい。
アイン・フォン・ヴォルテンベルクがここにいる全員の代金を払っ
てやる。」

その声を皮切りに店の客が歓声を上げる。

「ヴォルテンベルク卿バンザーイ。」

「ゲルマニアバンザーイ。」

「よしっ。今日はとことん飲むぞ。貴族様のおごりだ！遠慮するな。」

ようやく周りが騒いでることに気づいたラウルは騒ぎの中心に目を
向ける。

そこには周りの男とは一線を画した気品あふれる格好をした男がい
た。

とはいっても気性があらわれているのか野性味あふれる顔つきであ
ったので

似合ってはいなかった。

「む。その平民。美しいな。来い。同席を許す。」

清々しさすら感じさせる上からの態度にラウルは怯むことなく男の

席に近づく。

（実にいいタイミングだな。こうまで都合がいいと奴の台本に踊らされているようだが
かまうまい。精々利用させてもらおう。）

内心でそんなことを考えながらラウルは貴重な情報源を得たことに喜んでいた。

そう、隠しきれずに妖艶な笑みを浮かべてしまうぐらいには。

第5話 絡まれる女（後書き）

はい。

まあハルケギニアです。

主人公に原作知識はありません。

筆者も16巻までです。

大隆起とかガンダールブの由来とか最後の使い魔とかは何となくわかりますが。

設定上ヒロインは複数になるでしょうが

トリステインには1人いるかいないかだと思います。

タイトル通り目的地はアルビオンなので早めに着けるようにはしたいです。

後BLフラグはないです。

主人公が女性体に拒否がないのは割り切っているからです。

この男はあまり性差を意識していません。

もし男を好きになり、相手が望めばためらいなく女性になると思います。

ですのでヒロインが主人公になる可能性はなきにしもあらず。

第6話 猫を被る女（前書き）

ぎゅうぎゅうに書くのをやめました。

読みにくいと感じたら意見を聞かせてください。

第6話 猫を被る女

「こんにちは。貴族様。お声をかけていただき光栄です。」

ラウルは楚々とした仕草で貴族に近づいていく。

「ほう。ただの平民かと思えばなかなか礼儀を知っているようだな。もしやメイジなのか？」

「（メイジ？魔法使いがいるのか？）いえ、私はこの通りしがない旅人でございます。」

この剣は自衛のために下げているのです。」

「なるほどな。だが魔法を使えなくともその態度、とても平民出とは思えん。」

平民上がりの貴族でも父に持ったのか？」

「（平民上がり？この口ぶり、魔法を使うには血筋が必要なのか？遺伝か？ちっ、情報が足りん）私の出自など貴族様のお耳を汚すだけと存じます。」

私なぞのことよりあなた様のことをお聞かせ願いますか？」

ラウルは自己嫌悪を隠しながら貴族との会話を続ける。

「そうか、貴様は旅人であったな。」

私の名はアイン・フォン・ヴォルテンベルク。ヴォルテンベルク男爵家の長子だ。

今日は亜人討伐の帰りだな。こちら側の被害も少なく快勝だったのだ。」

「それは素晴らしいことです。私たちも安心することができます。ヴォルテンベルク様が指揮をおとりになられたのですか？」

「ああそうだ。私は火のトライアングルだからな。

酒の席だ。堅苦しい呼び方はよい。アインと呼ぶことを許す。貴様の名はなんだ？」

「（火のトライアングル？まあいい。名前か・・・）フィオナと申します。アイン様」

「フィオナか。美しい名だ。貴様によく似合っている。」

「ありがとうございます。（ラウルからの連想とはいえ我ながら安易だ）」

ラウル（以後フィオナ）はアインをおだてながら着々と必要なことを聞いていく。

その情報を整理すると以下のようになる。

この世界、ハルケギニアには大きく分けて5つの国がある。

始祖の血を引く王家があるトリスティン、ガリア、アルビオン

始祖の弟子と称する宗教国家ロマリア

そしてここ帝政のゲルマニア

国土的にはガリアとゲルマニアが抜きん出ているが

ゲルマニアには始祖の血が入っていないため立場が弱いらしい。

隣国のトリステインとは勝負にならないほど軍事力に差があるのに
トリステインの貴族はゲルマニアの貴族を下にみる風習がある。

なぜなら、ゲルマニアでは金を積みめば誰でも貴族になることができるからだ。

現代人の感覚だと優れているのはゲルマニアのように思われるが
先進的すぎてこの世界では受け入れられないだろう。

（何せ6000年の支配だからな。）

この世界の宗教はブリミル教という。

何でも6000年前に実在した人物だという。どうやらその人物が
偉大なことをしたおかげで今の生活があるらしい。

ブリミル教は始祖たるブリミルをあがめる崇めるための宗教で

全ての国で国教となっている。

（なんだ、それは。ただ崇めるだけが宗教だと。ふざけているな。
しかも私は異端認定される可能性があるじゃないか。
精霊が見える事を隠しておいてよかった。）

魔法は貴族の血筋でなければ使えないらしい。

というよりも貴族でなければ教えを受けられないといった方が正しいのだろう。

火・水・風・土の4属性を元として同時に属性を掛け合わせる事のできる数でもって

メイジのランクが決まるということだ。

属性は得意不得意があり大抵は親の遺伝によるものとされている。

また別枠で虚無という属性がありこれは始祖のみが使うことができるとされている。

魔法の力は圧倒的であり、使うのが子供でも大の大人を殺すことが可能とのことだ。

そのため平民は貴族に逆らうことがない。稀にメイジ殺しと呼ばれるものもいるが

メイジに勝てるのはメイジだけという常識が構築されている。

(なるほどな。この世界の人間はどうも研究するということに興味がないらしい。

なぜ使えるのか、どういった応用が利くのかということをもろで考えていない。

進歩がないわけだ。その上精霊が見えていないにもかかわらず彼らを使役している。

彼らが嫌うわけだ。」

魔法の行使には杖が必要であり詠唱することによって発現する。

またその際周りの精霊達への了承はなかった。（実際に見せてもらった。）

亜人達が使う魔法は先住魔法と呼ばれ基本的に人間の魔法よりも強いらしい。

特にエルフに勝つには10倍の兵力が必要とされ恐怖の対象になっている。

（ふむ。おそらく先住魔法とは精霊との対話が必須なのだろう。当然威力は比べものにならないだろうな。）

亜人は様々な種族がおり基本的に人間と関わりを持つことはない。

オーク、トロールなどは害があるため獣の扱いと同じく討伐の対象になる。

人間ほどの知性を持つものは恐怖の対象として恐れられている。

吸血鬼や翼人、エルフなどが該当する。

（ずいぶんと怖がりだな。どうも地球とは人間のタイプが違う。

当然といえば当然かもしれないがこれは前提条件に入れておいた方がいいな。）

他にもアインがいかに優れているかとかゲルマニアの男性は情熱的

であるとか

アインがフィオナに惚れたとか、君の妖艶な笑みがまたみたいとか
実に余計な情報が多く紛れていたが割愛する。

「フィオナ。私は君ほどの女性を見たことがない。
そうか私の妻になってほしい。君が平民であろうが関係ない。
私と一緒にしてくれないか。」

どうやらフィオナと話すうちに女神の魔力に当てられたらしい。

彼女はそう結論づけると

（確かにそれもあるが彼女自身の魅力の方が割合は大きい。）

「お戯れを。私とアイン様では釣り合いがとれません（おまえの方が）
が」。

アイン様にはもっとふさわしい方がいらつしやるでしょう。」

「いや、私には君しかない。この出会いは運命だ。

君ほど知的な女性を逃したとあればヴォルテンベルク家の損失だ。

」

「（しつこいな。）私は偽るのがうまい女です。
本当の私を知れば幻滅させてしまうでしょう。
私はあなたと添い遂げることはできません。」

半ば強引に話を打ち切るとフィオナは店外へと走り出した。

第6話 猫を被る女（後書き）

少し強引すぎたかな。

ハルケギニア説明回。

フィオナはスパロボのグレデーン兄妹の妹の方。

思いつきです。

後悔はしていない。

第7話 逃げ出す男女（前書き）

思いつくまま書いています。

第7話 逃げ出す男女

「待ってくれフィオナ。私は君をあきらめないぞ。
きつと君を見つけて私のものにするからな。」

後ろから聞こえてくるアインの求婚から逃げるように走り出す。

「さすがに悪い気がするわ。それでもいきなりプロポーズとはね。
女神の魔力は危険すぎるようね。この体で男には近づかないようにしないと。」

思わず女言葉でアインにわびるフィオナ。

原作では男の状態のセリカであってもアビルースを狂わせたのだから
当然といえば当然だが、おそらくフィオナの演技も無関係ではない。

「さてと、大体知りたいことはわかったし通貨を得る手段も見つかったわ。」

この町は彼がいるから首都にでも向かいましょうか。」

傍らの精霊達に問いかけながら町を出る。

(しゅと) (おおきなまち) (らうる) (ふいおな?) (どっちも
おいしい)

「そうね。町を出たら男になりましたよ。どうやら魔力の質も変わるようだし

思っていたより利便性が高いかも。」

女性体に慣れたらしいフィオナは戸惑うことなく女性らしい所作で町を出る。

男に戻ったラウルは一路ゲルマニアの首都ヴィンドボナを目指していた。

「フィオナと私では性格が変わるようだな。今考えてみても男の時に比べ開放的であったように思う。体の影響かもしれないな。」

(ふいおな) (らうる) (ちがう) (あじ) (どっちもすき)

「ああ、ありがとう。まあ気にしたところで解決法があるわけではないし

どちらも私であることには変わらないか。いつそのこと1人称も変えるでしょう。」

(らうる) (わたし) (ちがう?) (わたし) (わたし?)

「そういえば君たちと話すときは私で統一していたな。

・・・まで、いつから俺と言わなくなった。まいったな。

この体の影響は大きいらしい。今度から意識してつかうか。」

(おれ?) (だれ?) (らうる) (わたし) (おれ)

「そうだ。君たちはラウルと呼んでくれればいい。これは俺自身の問題だからな。」

（らうる）（おれ）（おなじ）（かわらない）（いっしょ）

ラウルは精霊達のいつもと変わらない行動に感謝しながら歩き続ける。心なしに足取りが軽くなっているようだ。

「さてヴィンドボナにいたら、早めに仕事を探るか。できるだけ近郊の亜人退治があればいいが。」

（あじんたいじ）（たたかう）（らうる）（てつだう？）（おなかすいた）

「亜人とは言っても悪さをしたオークや트롤を選ぶし亜人でなければ盗人でもいい。戦うとは言っても正直危険はないだろうから

手伝わなくても平気だよ。君たちの声が聞こえる相手と争う気はないから。」

ラウルは動物を殺すことに対して忌避感が薄い。

生前から他人に対しての執着が薄かった。一般の倫理観は知っていたが、

それを捨て去ることに対して抵抗がなかった。

だからこそ狂っているといわれても否定しなかった。

「やり過ぎないように最初は団体の仕事について行くか。メイジと平民の差をわかるし何より水準を知ることが重要だ。」

そうつぶやくラウルの口調はまるで他人事のようにどこまでも事務的だった。

第7話 逃げ出す男女（後書き）

主人公の異常性が徐々に明らかに。

第8話 眠りにつく男

ラウルは一週間ほどかけてヴィンドボナにつくとその足で仕事の幹旋場に向かった。

アインの話によると普通貴族や国が仕事に必要な人材を集める場合その町の役人に募集を頼むらしい。

丁度日本におけるハローワークのようなものだろう。

幹旋場に掲示されてる紙をとって提出すれば仕事を受けた事になるのだ。

「さてとどうやら文字は読めるみたいだな。まあ様の知識様々だ。どれにするか、盗賊団の討伐か。20名に対して国軍20名。募集人数が20名か。

国軍の補強か、いやこの場合先発隊だな。丁度いい。これにするか。」

ラウルはその紙をちぎり役人に提出した。

「はい。受理しました。3日後の正午こちらにいらしてください。前金として20エキューですね。仕事の成功後残りの20エキューを支払います。

宿は決まっていますか？」

「いや、決まっていない。幹旋してもらえるのか？」

「幹旋もしていますが、基本的にこの3日間の居場所をできるだけ明確にしていたくために聞いています。予算はおいくらですか？」

「できるだけ安く頼む。食事はついていなくともいい。」

「ではこちらですね。食事なしの素泊まりで50スウです。店の名前は『暖炉の癒し亭』。地図はこちらです。」

「ありがとう。ではそちらの店に泊まらせていただこう。」

『暖炉の癒し亭』はその名のごとく1階の広間に大きな暖炉があり2階が客室となっている構造だった。

「役場でこちらの店を紹介されたのだが空いている部屋はあるか？3日間素泊まりで頼む。」

「あいよ。右から3番目の部屋が空いてるからそこにしな。何か食いたくなったら注文してくれよ。」

「ああ、そうさせてもらう。」

ラウルがドアを開けるとベッドと小さな机がぽつんと置いてある殺風景な部屋だった。

「こんなものか。さてとようやくゆっくり休める。」

この世界についてから部屋の中で休むのは初めてである。

些か普通とは違う人間であつたとはいえ緊張を保つのに限界がある。

見知らぬ世界を手探りで旅をすると言うのは異常なストレスを伴うものだ。

ラウルは落ち着ける環境をあえて作り出さないことであえて精神の均衡を保っていた。

精霊という無垢な存在も助けになっている。

それでも限界は目にみえていた。ラウルの張り詰めた雰囲気伝わっていたのだろう。

ここ数日精霊も口数が少なかった。

(らうる) (へいき?) (げんきない) (ゆっくりやすんで) (がまん)

「ああ・・・ありがとう。今日はもう寝るよ。おやすみ。」

ラウルはこの世界で深い眠りによろやくつき

そのまぶたは夜明けを迎えたとき、涙に濡れていた。

第8話 眠りにつく男（後書き）

夢の内容は前世のあれこれです。

この時点で書く気はあんまりないです。

第9話 観察する男（前書き）

ゼロの使い魔を再度集め直しています。
改めて読むと結構新しい発見がありますね。

第9話 観察する男

『暖炉の癒し亭』を宿にして3日後の朝、幹旋場に向かうラウルの姿があった。

この3日間ラウルはヴィンドボナの町を散策していた。

大国の首都なだけあって町は活気にあふれ道のそこかしこで客引きの声が聞こえる。

店を冷やかしながらこの世界の薬草や武器など、生活レベルを確認していた。

銃や火薬なども確認できたがどうやら大量生産技術はないらしい。

似たようなものはあったが統一された規格ではなく手作り感にあふれていた。

話を聞くと職人の手によるものであり、作り方などは独自に編み出すとのことだ。

（ふむ。仕方ないと言うよりも当然か。産業革命が起きるのはまだ先のようなだ。

というよりこのままでは起きる可能性は薄いな。閉塞した世界か。某第5位天使によれば望ましいのだろうからこれも1つのあり方だな。）

剣はあくまで装飾品の要素が強く、実用に耐えるものは少ない。

高級な品はメイジが作り錬金により彩色が施されている。

明らかに見栄え重視だが、それでも謳い文句は名剣だ。

（確かに魔力はあるようだが、不純物が多いな。これで売り物か。メイジが戦闘の中心というのはこういったところにも理由があるのか？）

驚いたのは服飾品が多いことだ。奇抜なデザインも多いが

日本でも通じるような服がある。

（貴族が長く権力の中心にいると言うことは芸術が発達したと言うことか？）

だが明らかに別系統の感性から作られたものがある。
掘り出し物だと言っていたから特別なのだろうが。）

そんな風に異文化を楽しみながら過ごしていた。

幹旋場につくと役人に仕事の内容を告げ集まる場所を指示された。

指定された場所に行くと既に雇われたと思われる男達が10人ほど集まっていた。

「あん？女が何のようだ。まさか討伐に参加する気か？」

「俺は男だ。」

ラウルは間違われるのを想定したように短く返答する。

「男？そんな面でか。この仕事は遊びじゃねえんだ。足を引っ張るんじゃないぞ。」

「ああ、気をつけよう。」

「ちっ。変な野郎だ。」

その後特に絡まれることもなく国軍がくるまで剣の手入れをして過ごしていた。

「私はヴィンドボナ守備隊のセルゲイ・カーチスだ。」

今回の仕事は街道を外れた洞窟を根城とする

クロウ盗賊団の討伐である。団員の生死は問わないが団長のクロウは生かして捕らえるように。」

そう宣言したのは筋骨隆々の大男だった。目算で2メートル程の身長で

腕の太さは子供の体にも匹敵する。剣を携えており、どうやら魔法は使えないようだ。

「セルゲイ・カーチスだと・・・。」

「平民上がりの貴族でありながら鉄腕の二つ名を持つメイジ殺し・・・。」

「そんな大物が何でこんな仕事に。」

（どうやら有名のようだな。団長以外はメイジのようだし
メイジ殺しと言うことは身体能力が高いのだろう。
水準を知るには願ってもない人材だな。）

周囲の人間は思わぬ大物の出現に仕事への裏を感じ始めたが、

ラウルは一人ほくそ笑んでいた。

第9話 観察する男（後書き）

戦いまでいきたかったんですが
文化解説で終了。

あくまで主人公が感じたことですので
見方はいろいろあると思います。

某天使は人間の発展を望みません。

その後の破滅を体験しているためらしいです。

コルベールさんは彼女にとって討伐の対象でしょうね。

第10話? 説明作者1 (前書き)

10話ごとに補足を入れてみます。
いないという意見が多ければ次回からはなくなります。

第10話? 説明作者1

1話

主人公の死

人を顧みない管理者

憧れとか知るか馬鹿。

2話

過負荷のない能力

女体化

目立ちたくない

3話

迷子

精霊

これがこの小説の癒しかもしれない

4話

精霊との交流

町到着

それにしてもこの男悲壮感がない

5話

情報収集の基本、酒場

貴族登場

ようやく具体的な地名が

6話

ハニートラップ

主人公状況把握

案外女体化に抵抗がない。というかノリノリ

7話

次の目的地首都へ

自我確認

迷わず戦闘系とか少しおかしいと思う

8話

仕事ゲット

今日はもう寝るよ

それにしても途中の描写がないのに話が進まない

9話

市場調査

鉄腕登場

書いといてなんだがメイジ殺しに重要なのはスピードだと思う次第。

力石か！

ラウルの設定

戦女神シリーズの主人公、セリカ・シルフィルの体

赤髪で女顔。まあもともと女神の体だし。

ZEROで髪を切る前の長さ。魔力欠如による女性体への変化ではないため

基本的に動きが阻害されることはない。

剣技はどちらでも使えるが魔術に関しては少し変わる。

男性体時は電撃魔術・性魔術が使える。

まあー様の知識があるため暗黒魔術と基礎的な各属性魔法もつかえ

る。

女性体時は治癒・強化・戦意魔術
戦意魔術とか虚無相手だとチートだと思う。

感想欄にも書きましたが男の時の魔力は闇属性。女の時は光属性。
ゼロ魔だと闇は水と土関係、光は火と風関係と思っていただければ。

リウイの王の資質

簡単に言えば戦略・戦術に秀でる。

内政・外交共に任せられます。

決断力にも補正

まお様の魔力と知識

先にも書きましたが男の時はこちらの魔力の方が強い
イメージ的には闇と光は反発しながら循環している。

つまり魔力が枯渇するといったことが起こりにくくなっています。
反発することによって増えるわけです。筋肉みたいなもの？

知識は魔力の運用、文字などの多岐にわたる

地味目だけど多分異世界生活では1番役に立つ

ウィルの工匠能力

素材があれば何でも作れるんじゃない？というぐらい
実際原作でも生活に必要な様々なものを作っている
浄水器とか温泉とか森林にいい栄養剤とか。

そりゃ天使も警戒するわ。

落ち着くところができたら大活躍の予定

今の装備

VE R I T A冒頭のセリカの服装そのまま
剣としてルツアソード

一番始めの剣だけど説明が上位騎士が一般的に使う魔法剣
多分ハルケギニアだとかかなり上位の剣だと思う
気付いたら身につけていた

管理者の情け

名前

ラウルバーシュ大陸からラウル（出典…エウシュリー）

ラウル・グレーデンの妹からフィオナ（出典…スーパードロイド大戦）

管理者様から名付けられたという設定。

それなのに女性時に偽名を使う。

ラウルはその名前によって存在を定められている。

女性体になることに関しては違和感を感じていないが
自分とは違う存在だと思っている。

これは戦女神の設定に心から傾倒しているため

男性体時の名前を名乗るのは拒否感が強かった。

小説上だとあっさりだったが逆に深く悩むと偽れなかったと思う。

偽名が名乗れたのは無意識の勝利。

考えれば考えるほどラウルという名前の縛りは強固になっていた。

ゼロ魔の魔法

原作読み返してみたら8巻でジュリオが語ってる。

OK。間違ってるね。

すいませんでしたあー！

ですがこの作品では4系統の魔法は精霊を使役するものと言うこと
でお願いします。

独自解釈。いい言葉ですね。反省はしていますが後悔はしていません。

ヒロイン

未だ原作に突入していない内からヒロインとか・・・
主人公の会話の相手はしばらく精霊達だと思います。

ヒロインはアルビオンの2人かトリスティンのお姉さんかな？
オリジナルも考えていますが人間ではないと思います。
出すとしたら亜人ですね

種族は決定していません。原作にいない種族かも

精霊の名前

つける気はないです

つけた方がいいと思いますか？

作者は名前考えるのが苦手なので

つけた方がよければ希望の名前を教えてください

以上作者のいいわけタイムでした。

第11話 戦闘する男（前書き）

シリアス？

第11話 戦闘する男

鉄腕率いる国軍を先頭にし討伐隊は盗賊団のアジトがある洞窟へを進軍した。

軍と違い傭兵の集まりである後方では

この任務について憶測を大いに含んだ四方山話が繰り広げられていた。

「クロウってのは一体何やったんだ？鉄腕が参加するほどのことなのか？」

「何でも閣下にとって重要なものを盗んだらしい。」

「いや、俺が聞いた話じゃ教会が関わっているとか。」

「そもそもクロウとか言うのはどんな奴なんだよ？ここらじゃ有名な奴なのか？」

「おまえ旅人か？クロウと言えば首都じゃ有名だぜ。」

盗賊団と言うよりも人身売買でな。人はもちろん亜人も扱うらしい。

商品をどこからかさらってくるから盗賊団と呼ばれてんだよ。」

「なるほどな。それじゃ今回の目的は攫われた某を救うことかい。」

「ああ、そうかもな。」

そんな話を聞きながらラウルはこれからどうするかを考えていた。

（こいつらの話が本当なら今回の件相当きなくさいな。

安い報酬、団長を除いての生死問わず、優秀な兵士の参加。盗賊団と同じ人数をそろえておきながらさらに必要とする。

確かに安全にはなるがなぜ傭兵である必要がある？

鉄腕というのは叩き上げだ。能力は十分だろう。

攫われた存在というのがよほど大物なのか？

だが安い報酬というのがな。どうも引っかかる。…切り捨てか？）

明確な回答を導き出すことができずに目的地に着いてしまった。

「作戦を説明する。まず先発隊10名が奴らのアジトに奇襲を仕掛ける。

奴らが反撃にきた段階で撤退し奴らが洞窟から出てきたところを残りの10名と傭兵隊が襲う2段階の戦法だ。

傭兵隊は我々が魔法を使ってから飛び出せ。何か質問は？

…ないようならすぐに始めるぞ。」

セルゲイは説明を終えると直ぐに動き出した。

（妥当な作戦だが、なんだ？違和感が拭えない。…注意しておくか。

）

ラウルはとりあえず思考をやめ、戦闘に備えた。

作戦通りセルゲイを含めた10名の軍が洞窟に進入すると怒号と爆発音が響いた。

戦闘が始まったらしい。作戦通りならもうすぐ盗賊が出てくるだろう。

（この世界での、いや初めての殺し合いだ。冷静に、余計な力を使わず戦おう。）

（らうる）（むりしないで）（がんばって）（けがしないで）（だいじょうぶ）

「ありがとう、みんな。君たちは離れていてくれ。あぶないからな。」

精霊に励まされ笑顔を浮かべる。ふと剣の柄をみると汗がにじんでいた。

どうやら無意識に緊張していたらしい。ラウルは改めて精霊達に感謝する。

「まだ心は人間のようなだな。」

苦笑しながらそれでも嬉しそうにするラウルの顔に緊張の色はなくなった。

「軍が逃げていくぞ。いくら相手がメイジだとは言え俺たちと同じ人だ。

恐れずに立ち向かえば勝てる。」

「地の利はこちらにある。奴らに目にももの見せてやれ！」

盗賊達が撤退している軍のメイジを追いかける。

洞窟から出てくるものがなくなった後入り口の近くに伏せていたメイジ達が一斉に魔法を唱え襲いかかった。

「いまだ！ かかれえー！ 盗賊を根絶やしにしろ！」

セルゲイの合図に従い混乱した盗賊達に傭兵隊が攻撃を仕掛ける。

ラウルは盗賊の1人に目標を定めた。

「ちきしょーがあ！ 卑怯な手を使いやがって。ぶっころしてやる！」

男はそう叫ぶとラウルに向かい突進してきた。

「こんなものか。日本人とは比べるまでもないが予想と大して変わらないな。」

男の突進をみてラウルはそう評価するとすれ違いざまに剣を一閃した。

次の瞬間男の意識は永遠に戻ることはなくなった。

「これで俺も人殺しか。…感傷に浸っている暇はないな。」

そうつぶやくと背後から迫っていた盗賊に斬撃を加える。

「圧倒的だな。ここまでする必要があったのか？」

周囲を見渡せば未だ戦闘は続いているものの残党狩りのような状態だ。

「ん？セルゲイがいない？いや、軍の人間も10人ほどしか見えないな。」

「…成る程な。だとすれば洞窟の中に今回の目的があるのか。」

ラウルは得心がいった表情で戦場を静かに離れ洞窟に向かった。

第11話 戦闘する男（後書き）

戦闘描写ムズイ。

でも敵が弱ければこんなものだと思う。

成り上がり↓叩き上げ

第12話 出会う男

ラウルは表で戦っている兵士に見つからないよう洞窟の中に侵入した。

洞窟の中は思ったよりも広く灯りがついていていた。

戦闘の痕もそこかしこにあったが小規模で

セルゲイ達先発隊が手加減していたのがよくわかる。

おそらくこの中にいるであろう人間に気付かれないよう

警戒しながら進む。

「みんな。お願いがある。」

(なに?) (らうるのてつだい) (いいよ) (がんばる) (おしごと)

「ありがとう。この洞窟内に君たちが見える者がいたら教えてくれ。」

(わかった) (さがす) (がんばる) (ごはん) (まかせて)

「頼んだ。ご飯は落ち着いたらな。」

精霊達に頼み事をするとは独白する。

「俺の勘が正しければさっきの戦闘なんて遊びに思える相手と
相対することになるか。まだ死にたくはないから気を引き締める
か。」

笑いながら万が一にも有り得ないことを考え気合いを入れ直す。

その姿は10人中10人が楽しみを控えている子供のようだと判断
するものだった。

(らうる) (みつけた) (みつかった) (いそいで) (たいへん)

精霊達がラウルの近くに集まる。

その様子から事態は切迫したものだと言うことがうかがい知れる。

「そうか。先導してくれ。」

精霊達は直ぐに引き返しラウルはその後を急いで追った。

幾度かの分かれ道を経て先へ進むと奥からセルゲイの声が聞こえて
きた。

「情報通りだな。しかし本当に捕らえられているとは。
クロウという男、なかなか侮れんな。」

「確かに。ゲルマニアで雇いますか？」

「いや、それはできんな。こいつはあまりにも有名すぎる。残念だ
がな。」

会話から察するに彼らの目的は既に達せられたようだ。

（少し遅かったか。どうするか。助ける義理はないが知りたいこともある。）

（らうる）（うしろからくる）（にんげんがふたり）（まだすこしとおい）（いそいで）

ラウルが悩んでいると精霊達が新しい情報を教えてくれる。

（ちっ。まだ集まってきていない奴がいたか。迂闊だった。悩んでいる暇はないな。）

先手を敵に譲る前にラウルは勢いよくセルゲイ達に向かって飛び出した。

「隊長！気をつけてください。」

「何事だ！」

ラウルはまずセルゲイの周りにいた兵士達を昏倒させるべく動いた。広間にいた男の数はセルゲイを含め8人。次の瞬間には6人が意識を失っていた。

「ちっ。なんて速さで動くんのだ、隊長お逃げください！」

「安心しろ。殺す気はない。」

宣言通り倒れ伏しているもの達に血の跡はない。

立っているのはラウルとセルゲイだけとなった。

「貴様、傭兵隊のものだな。目的は何だ。なぜ我々を襲う！」

「目的はあなた方と同じだ。」

「なにっ！この情報はどこにも漏れていない筈だ。もしやきさま
亜人か？」

「ただの偶然だ。この仕事を受けたときにこうなるとは予想してい
なかった。」

「偶然だっ！信じられるか！」

「だろうな。俺とて信じられない。」

「馬鹿にしているのか！秘密を知った以上生かして帰すわけにはい
かん。」

「ここで死んでもらう。鉄腕の意味を教えてくださいわ！」

ラウルの態度に馬鹿にされたと感じたセルゲイは激昂し

その身に合った大剣を構えラウルと対峙した。

剣を構えたセルゲイは体の大きさと相まってすさまじい威圧感を発
している。

ラウルはその威圧感を感じながら歓喜していた。

（ああ。これがこの世界の一流か。素晴らしい。押しつけられた力とは違う。

正真正銘の自分自身の力だ。俺はこういう人間に憧れていた。）

はつきり言ってセルゲイの威圧感は脅威に値しなかった。

だがしかし、それでもラウルは彼に敬意を払う。

先の兵士とは一線を画す強さ、激高しながらも構えに隙がない精神力、

作戦の目的を最優先にし、かつそれを傭兵に悟らせない頭脳、

どれをとっても傑物である。並大抵の者ではかなわないだろう。

（すさまじいな。ここまでの実力を得るためにどんな人生を歩んだのだろう。

その男を俺は今から圧倒的な力でねじ伏せるのか。

だが彼に憐れみなどかけてもそれは自己満足でしかないな。）

「セルゲイ・カーチス。」

「なんだ！」

「俺の名前はラウルだ。」

「ふん。いくぞ！」

「来い！」

始めに動いたのはセルゲイだった。

その巨体からは想像できないほど機敏な動きでラウルに迫る。

「はああああー！」

雄叫びと共に大剣を振り下ろす。

ラウルはバックステップで躲すと直ぐに踏み込んだ。

「あまいわあー！」

振り下ろされた大剣は勢いを落とさずに地面に突き刺さる。

その衝撃で石礫がラウルに襲いかかる。

「ちっ。」

出来るだけ大きい礫を避けるように左へ体をずらす。

だが急激な方向転換に体はついてきてもラウルの意識まではついてこない。

「くらえっ！ 儂の一撃は重たいぞ！」

「くっ！」

セルゲイのなぎ払いに合わせ右側に剣を構える。

すさまじい衝撃が伝わりラウルは弾かれる勢いを利用し距離をとった。

「ほう。よくぞ受けた。なかなかいい剣を使っているな。」

セルゲイはラウルに向き合い構え直す。その姿に油断はない。

「くそっ。」

（奴の動きはわかる。身体能力も段違いだ。だが俺の意識がついて行かない。

いや俺自身がセリカの剣技を使うことをためらっているのか？

戦闘経験というのが大事なのはわかってるつもりだったがこれ程とは。）

ラウルの考えはある意味正しい。セリカの剣技を使えばハルケギニアで

まともに打ち合える存在は少ない。剣技でなくとも魔術を使えば直ぐに倒せる。

その身に宿るのは神殺しの力であり人間が敵うことはないと言言できる。

しかしいくらその力が強大であろうと使う者次第で引き出せる量は変わる。

今のラウルはその力に振り回されているに過ぎない。

戦闘経験云々でなく力の加減がうまくいかないのだ。

ラウルが思考している間にもセルゲイの猛攻は続く。

「そらそら。どうした。守ってばかりか！」

「くっ、がっ！」

セルゲイの1撃を受けるたびにラウルの心に恐怖がしみこんでいく。体に影響はないが初めて命のやりとりを行ったのが今日だと言うこともあり

いつしかラウルの体は震えていた。

「ふん。恐怖に支配されたか。随分ちぐはぐな男だ。

この作戦に疑問を持ち、国を相手にするほどの度胸を持つ。

兵士を一瞬で昏倒させる実力もある。それなのにこの体たらくとはな。」

「黙れ。」

「まあいい。所詮は亜人ということだな。偉大なるブリミル教の恩恵を

受けることが出来ない哀れな種族め。二人まとめてあの世へ送ってやる。」

セルゲイはそう吐き捨てると大剣を肩に担ぎ全身に力を込めた。

次で決めるつもりらしい。

「恨むのなら自身の生まれを恨むのだな。」

「!!!!!!!!!!」

「くらうがいい。鉄腕の異名が由来の一……」

最後まで言い切ることなくセルゲイの右腕が飛ばされる。

「なっ！ 儂の右腕があああー！」

「飛燕剣、身妖舞。眠っている。」

その言葉と共にセルゲイの意識は落ちた。

「自身の生まれなど既に恨んでいるさ。こんな力を持ったことをな。」

その言葉を聞いた者はいなかった。

剣についた血糊を拭き、セルゲイの右腕の止血を済ますと

ラウルは広場の奥に向かった。

そこには牢屋があり中には美しい金の髪を持った少女が一人囚われていた。

「おい、大丈夫か？」

「！どなたですか？ゲルマニアの兵士様ですか？私に敵意はありません。」

ただ始祖に対して祈りたいだけです。」

少女はそう言うところらに顔を向ける。

その耳は尖っており人の持つものとは明らかに異なっていた。

第12話 出会う男（後書き）

気付いたら3時間たっていた。

戦闘描写よりもラウルの厨二っぷりがひどい。

第13話 逃走する男とエルフ（前書き）

初原作キャラですがほぼオリキャラです。

ゲルマニアは兵士なのか騎士なのか？

第13話 逃走する男とエルフ

「落ち着け。俺はゲルマニアの兵士じゃない。おまえに危害を加える気もない。」

ラウルは興奮している少女を落ち着かせようと両手を挙げた。

「ではどちら様ですか？私をどうする気なのですか？」

「個人的な理由で助けてやる。待っている、今鍵を開ける。」

牢の扉に近づき鍵穴に手を伸ばす。

「助ける？…で、でも鍵はここには「よし、開いた。」ありま…えっ。」

ラウルには「開錠」スキルがある。本来なら鍵自体も必要だが、

例によって神に改変されているのか針金（セルゲイの治療時に入手）で

ピッキングすることが出来た。

「手を出せ。その枷も解いてやる。」

「は、はい。お願いします。…なぜ私を助けてくれるのですか。」

「その理由はここから出たら話してやる。余りもたもたしていられないからな。」

少女の拘束を解除すると直ぐに周りの壁を調べ始めた。

「あの、一体何を？」

「少し黙っている。…あった。ここだな。」

不安げな表情で見つめる少女を尻目に、ラウルは自身の勘が正しかったことに安堵した。

アジトには隠し通路がいくつかあるはずだという仮説は当たったらしい。

ラウルはそれを「探求」スキルで見つける事に成功したのだ。

「こんなところに道が…。あなた、一体何者？」

「それも後で教えてやる。ついてこい。」

ラウルは少女がついてくることを確認しながら出口へ急いだ。

「出来るだけ早くこの国から出なければな。」

入り口は塞いだがいずれ発見されるだろうし。」

通路に灯りはなく指先に光をともしながら進む。

「おい、足下に気をつけろよ。」

「は、はい。」

少女はたどたどしいながらも必死にラウルを追いかける。

「見ていられないな。皆、彼女の周りを照らしてあげてくれ。」

（わかった）（てらす）（てつだう）（ともだち）（なまえは？）

「せつ、精霊？あなた亜人なの？」

「どうだろうな。少し急ぐぞ。」

彼女の質問に答えることなく速度を上げる。

しばらくすると外から赤い光が差し込んできた。

「ようやく出口か。出来るだけ人目を避けながら首都から離れるぞ。休むのはしばらく先だが大丈夫か？」

「はい。頑張ります。」

少女は明らかに疲労の色を隠せていなかったが、

ラウルはあえて気付かないことにした。

2つの月が頂点に差し掛かった頃、ようやくラウル達は歩みを止めた。

「今夜はこの辺で休むでしょう。何か食べるものをとってくる。お前は休んでいろ。」

「は、はい。お言葉に甘えます。」

少女は地面に腰を下ろすと木に寄りかかった。どうやら限界だったらしい。

精霊達に異変があったら伝えるよう頼みラウルは森の中に消えた。

「はあ、はあ。疲れた。歩いている途中あの人は喋らないし、何で助けてくれたのかもわからない。精霊が見えるから亜人だとは思っただけど。」

少女は息を整えながら独白する。その言葉に反応して精霊達が近寄ってくる。

(どうしたの?) (らうること?) (やさしいよ) (おいしいよ)
(こわくない)

「えっ。精霊達の声がこんなにもはっきりと?
それにあなたたち彼と一緒に行動しているの?」

少女の質問に精霊達は肯定の意を示す。

「信じられない：普通精霊は一定の場所を離れることはないのに。
それに無理矢理使役しているわけでもないなんて。」

彼女の驚きは当然だ。この世界の精霊は自然を拠り所としている。
世界中の至る所に精霊は存在しているが、縄張りを離れることはない。

亜人達が使う精霊魔法とはその土地の精霊に頼んで発動される。

土地の精霊と契約することでより大きな力を使う事が出来るようになる。

ところがラウルは固定の精霊と行動している。これは常識では考えられない。

いわばラウルという個人を縄張りとしているわけだ。

つまり彼が精霊魔法を使うときに場所によって威力が下がることがない。

例え他の誰かが契約している土地で契約している者と対峙しても
かまわず魔法を使うことが出来るのだ。

（ラウル自身は精霊魔法が使えることに気付いていない。）

「本当に亜人なのかしら、同族ではないだろうけど。」

ラウルの正体に悩んでいると、本人が戻ってきた。

その手には果物や木の実がある。今夜の食事らしい。

「先に食べられないものがあるか聞いておくべきだったな。
肉はまずいかと思って植物にしたんだが、大丈夫か？」

「なにからなにまでありがとうございます。大丈夫です。」

少女は目の前の食べ物を前に目を閉じると祈りの声を上げた。

「偉大なる始祖ブリミルよ。」

今宵もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝いたします。」

「それはブリミル教か？」

「はい。おかしいですか。」

「まあな。亜人が祈ると言うことは聞いたことがない。」

「そうですね、私もそう思います。」

ブリミル教は人間の宗教であり、亜人は信仰していない。

なぜならブリミル教にとって亜人は敵とされているからだ。

「私は始祖ブリミルが行ったことを知りたいのです。」

そのために故郷から出て旅をしていました。」

「そうか、人のことはいえないが随分と変な奴だな。」

そういえばお互いのことを碌に知らんな。

落ち着いたことだし自己紹介をしよう。ラウルだ。」

「私の名前はシャジャル。エルフです。」

ラウルは右手を差し出し、握手を求めた。

シャジャルは笑いながらそれに応じた。

手が触れあった瞬間、シャジャルの体に衝撃が走った。

「きゃっ！あ、あなたシャイターン？」

「なに？」

警戒心をあらわに後ずさるシャジャル。

その言葉を聞いたラウルは困惑し、伸ばした手を引っ込めることも出来なかった。

第13話 逃走する男とエルフ（後書き）

大体原作の20年前です。

ラウルがシャジャルを助けた理由などは次回に。

第14話 誤解をとく男

怯えるシャジャルに戸惑うラウル。

握手をした相手にいきなり悲鳴を上げられたのだ。

適切な対応など普通思いつくはずがない。

シャジャルの方もラウルを涙目でにらみながら震えている。

どうやら腰が抜けてしまったようだ。

この硬直状態を壊したのはある意味空気なのに空気じゃない精霊達だった。

(らうるちがう) (あくまちがう) (えるふにてる) (ともだち)
(だいじょうぶ)

「ち、違うの？ シャイターンじゃない？ でもその魔力は何なの？」

精霊達のおかげで幾分か気を持ち直したシャジャルだったが

未だ恐怖感は拭えていない。

「俺の魔力？…もしかして邪悪だったりするのか。」

「わからないわ！でも怖いの！」

「落ちて着け！何もする気はない！近寄らないから冷静になってくれ。」

」
シャジャルが落ち着いて話が出来ようになるまで1時間ほどかかった。

「大丈夫か。」

「え、ええ。ごめんなさい。助けてくれた相手を怖がってしまったてゝ。」

「いや、落ち着いたならそれでいい。
ゝそれでシャイターンのことについて聞いてもいいか？」

シャジャルの説明によると始祖が使う魔法の使い手らしい。

ブリミル教を信仰している彼女が恐怖感を抱くのはおかしいが

これでも随分まともな反応らしい。普通のエルフであれば

シャイターンであると感じた瞬間有無を言わず殺しに来るか気絶してしまうそうだ。

当然ラウルは虚無ではない。なぜ彼女がそう感じたのだろうか。

「あなたに触れた瞬間体がしびれたの。それで改めてあなたを見たら怖くなってゝ。」

「成る程な。エルフにとっての恐怖の象徴を思い浮かべた訳か。」

ラウルは勘違いであつたことに安堵しながらも

若干面倒なことになったと考えた。

（まさかまお様の魔力がこんな副作用を持っていたとは。

当然と言えばそうかもしれないがまさか亜人に会うたびこうなるのか？）

（らうる？）（だいじょうぶ）（おいしいよ）（こわくない）（やさしい）

「ありがとう。君たちもやさしいよ。」

精霊達の慰めが胸に響く。

「よし、一段落ついたところで助けた理由を話そうか。」

「え、ええ。随分いきなりね。」

「悩んでも仕方ないし、もう夜も遅い。明日も忙しいからな。」

ラウルの切り替えの速さに戸惑うシヤジャルだったが、

ラウルは気にせず助けた理由を語る。

「まず、お前を助けたのは成り行きだ。

お前である必要もエルフである必要もなかった。
貴重な亜人だと言うことは関係しているがな。」

「はあ。」

シャジャルの反応は無理もない。エルフが砂漠から出ることはほとんど無い。

シャジャルは自分がエルフであったから助けられたと思っていた。

それが違う。しかも成り行きだという。一国に敵対するには割が合わなすぎだ。

「始めはただ単に金を得ることが目的で仕事に参加した。だがその仕事に参加している途中疑問を感じた。

盗賊団と同じ人数をそろえながらさらに傭兵を雇う。

有能な人間が指揮を執っている。

どうやら盗賊団に攫われている人間を助ける作戦である。

団長を除いての生死問わずである。

戦力差があるのにわざわざ危険な役目を国軍が買って出る。

傭兵にとって賃金に見合う危険度の低さ。

1つ1つは別段おかしくはなかった。

だが攫われた人間が亜人であるなら話は別だ。」

「どうということ？それだけで亜人とは判断できないと思うけど。」

「攫われた人間が高名な貴族であるなら傭兵を使わず軍だけの方がいい。

使ったとしても危険な役目を任せるだろう。

傭兵を雇う賃金が安かったのも裏の事情を悟らせることなく

この作戦を単純なものに見せかけるためだろう。

傭兵を洞窟に近づけないのは表沙汰にしてはならない秘密があるということだ。

つまり国にとっての醜聞を始末することが目的だと思った。」

「…よくわからないわ。」

「クロウという男は人身売買を生業としていた。人間にとって亜人は敵だ。」

その敵を貴族が買う。大っぴらに出来ないがそれでも大事ではない。

だがその亜人が特殊な亜人であれば話は別だ。

人間が恐怖を抱く精霊魔法の使い手が貴族の手に渡る。

どの勢力が手に入れるかは知らないがゲルマニアの帝王に刃向かう貴族に渡った場合内乱が起こる可能性がある。

内乱の可能性があると自体国としては大事にしたくないことだし精霊魔法を使う亜人が国内にいることも国民の不安を誘う。

だから秘密裏にその亜人を始末することにした、というわけだな。

」

「そこまで考えつくの？」

「確信したのは盗賊を殲滅する際に鉄腕の姿がないと気付いたときだな。」

洞窟に入った後は精霊魔法が使えるなら精霊が見えるだろうと思い皆に頼んでお前を捜してもらったんだ。

見つけたときにはもう鉄腕はいたし、後ろからも兵士が来ている状況だ。

全員そろっていれば遅かったとあきらめ見捨てることも出来たが逃げ道はふさがれ奴らに見つかれば口封じに殺される。

しょうがないから助けることにしたんだ。」

「私、見捨てられるかもしれないなかったんだ…。」

落胆した様子でラウルをにらみつける。

「そうだ。絶対に助けなくてはいけないということではなかった。そもそも洞窟に入ったのも亜人という存在を見たかったからだ。興味本位だな。俺の短絡的な行動のせいで助かったようなものだな。」

自分が助けられた理由がしょうもないことだったと知り

笑うに笑えないシャジャル。

「別にお姫様みたいな扱いを望んでいた訳じゃないけど…。」

「助かったんだからいいんじゃないか？」

「乙女心は繊細なのよ！」

怒られる理由がよくわからず首をかしげるラウル。

だがわからないならそれでいいとばかりに話を打ち切る。

「明日も早い。さっさとねるか。」

「あ、ちょっとちょっと、…もうねてる。」

結局あなたは何者なのよ…。」

ラウルの正体については言及されないまま激動の1日が終わった。

第14話 誤解をとく男 (後書き)

シヤジャルさんはヒロイン予定ではないです。

エルフが魔力を感じる描写はオリジナル。

精霊魔法が使える亜人は全員魔力を感じることが出来ます。

第15話 質問できないエルフ

「おい、起きろ」

「うー、なんですかあ。おーじさまあ」

「…何を言っている」

ラウルは寝ぼけているシャジャルに呆れながら気にせず体を揺する。

そこに遠慮はなく羞恥もなかった。

シャジャルの見た目はエルフの特徴を気にしなければとても美しい美人である。

森の間から漏れる陽光を反射して光る長い金色の髪、

まるで絵画のように整いすぎている顔立ち、

美しい曲線を描き力を込めると壊れてしまいそうな華奢な体型。

男であれば好みでなくとも思わず美しいと感じてしまう容姿である。

…よだれを垂らし、しまりのない笑みを浮かべていなければだが。

「ちっ。いい加減目を覚ませ」

「ん？ いったいなに？ …あ、あれ？ 王子様は？」

遂に拳骨を落とされ強制的に覚醒させられるシャジャル。

「いつまでも夢を見ているな。さっさと支度しろ」

「えっ？ 夢？」

まだ半分寝ているシャジャルを尻目に朝食の準備を始める。

昨夜の残りなので大してかからなかったが、終わる頃には彼女も準備を終えていた。

「さて、お前はどこか目的地があるのか？」

「その前にいつまでもお前と呼ぶのはやめてくれない？ 私にはシャジャルという名前があるの」

少し怒った様子でシャジャルは告げた。

「ではシャジャル。俺のことはラウルでいい」

「（随分素直ね）ええ、わかったわラウル。とりあえずトリスティンにいくわ。」

最終的な目的地はアルビオンなのだけれどそこにいくにはラ・ロシエールというところから船に乗らなければいけないらしいの。

他にもよってみたい場所があるし」

「そうか。もしよければ一緒について言っていいいか？」

「それは構わない、というよりこちらからお願いしたいわ。でもいいの？私はエルフだし、報酬も払えないわよ？」

精々ゲルマニアの追っ手を振り切ったら別行動だと思っていた。

助けた理由も薄いし自分の存在は足手まといもいいところだ。

「構わない。俺に目的地はないし、特に別れる理由もないしな」

シヤジャルの存在がどういう事態を招くのか知らないはずがないのに

ラウルは何も問題がないといった態度で言い切る。

「だが一ついいか。なぜアルビオンなんだ？ロマリアではないのか？」

ブリミル教の本山はロマリアだ。

彼女が信者であるならそこを目指すものではないのか？

そんな疑問から問いかける。

「アルビオンには古代の遺跡がたくさんあるらしいの。それに私は今のブリミル教には懐疑的だしね。あくまで始祖の残したものを感ずたいの」

ラウルはそうか、と頷くと話はそれで終わりとばかりに立ち上が

る。

シャジャルも慌ててそれに続く。

道中シャジャルは何か言いたそうにしていたが

ラウルは特にそれに気付くことなく淡々と進む。

この男、必要がなければ口を開くことはない。

疑問があったり、会話することが主の場であれば

率先して話しかけるのだが、今は国から出ることが先決だと判断しているのだ。

時折シャジャルが意を決して問いかけるが

「あの、ラウル」

「なんだ」

素っ気ない返事が返ってきて、消沈してしまう。

そういったやりとりが何度か繰り返され

気付けば国境近くになっていた。

夜休む時もラウルは食べ物を調達した後周囲の哨戒に向かい、

シャジャルは日中の強行軍のせいで疲れ直ぐに寝てしまう。

結局ラウルが何者であるか、シャジャルは彼の口から聞くことが出来なかった。

彼女がわかっていることは精霊が見える事、強力な魔力を持つこと、

無口だがこちらを嫌っているわけではないらしいこと

並のメイジよりも強い存在であることぐらいだ。

私はいつになったら彼のことがわかるのだろう。

そんなことをシャジャルは思っていた。

第15話 質問できないエルフ（後書き）

話が進まない。

書きたいことは決まっているのにそこまで行く過程を書く力が欲しい。

シヤジャルこんな感じだと不憫すぎるかなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378t/>

空飛ぶ大陸での隠遁生活

2011年5月29日00時21分発行